

## 近現代史(1)「近現代史の流れ ～中世ヨーロッパから21世紀までの概観～」

### 【1】中世ヨーロッパ封建社会

ローマ帝国崩壊後、中世ヨーロッパは[① 封建社会]に入った。封建社会とは、土地を仲立ちとして主従関係を結ぶ分権的な社会である。封建社会においては、明確な国境は存在せず、各地の諸侯が皇帝や国王と複数の契約を結び重層的な世界観を構築していた。宗教的な権威は教皇権として[② カトリック教会]が担い、世俗的な権力は皇帝権として[③ 神聖ローマ皇帝]が担ったのである。

### 【2】教皇権と皇帝権の失墜

#### ・(1)[④ 教皇権]

##### a.政治的な変化

・[⑤ 十字軍]は失敗に終わった。この結果、教皇と各地の諸侯・騎士は没落し、軍を実際に率いた王権が強化された。各国の王は強化された王権によって中央集権的な国家を建設していった。イギリスとフランスの百年戦争の後、イギリスでは続いてばら戦争が起こり有力な諸侯・騎士が没落しテューダー朝が創始された。フランスでも国内の混乱で諸侯・騎士は没落し、国王による中央集権化が進んだ。

##### b.社会的な変化

・社会的な変化としては、十字軍にともない商業が発展し、貨幣経済の普及・遠隔地貿易の発達・イタリア諸都市の繁栄が生み出された。こうして[⑥ 農奴制]に基づく荘園制は崩壊していき、都市の発達により商人が成長した。イタリア諸都市では東方貿易の活発化・ビザンツ遺民の亡命・イスラームの刺激により[⑦ ルネサンス]が始まった。

#### ・(2)皇帝権 ～カール5世のヨーロッパ覇権への挑戦と挫折～

・皇帝権は、各国の王の上位概念であり、権威としては王権よりも格上だった。だが、皇帝権を担った神聖ローマ帝国はイタリア戦争にとらわれ、分裂傾向にあった。そこに登場したのがハプスブルク家の血筋を引くスペイン王[⑧ カルロス1世]である。フランスのフランソワ1世との皇帝権争いに勝利したカルロス1世は神聖ローマ皇帝[⑨ カール5世]として即位したのである。カール5世は外政としては[⑩ 大航海時代]の波に乗り新大陸を経営する傍ら、国内的には[⑪ ルター]の宗教改革と対決した。しかしカール5世は1555年の[⑫ アウクスブルクの宗教和議]でルター派を公認した後、退位した。こうして神聖ローマ皇帝が一つのヨーロッパを現出するという夢は破れた。

### 【3】主権国家体制

王権を強化していった各地の王は宗教戦争に直面した。その最大のものが1618年～1648年に起こった[⑬ 三十年戦争]である。神聖ローマ帝国のカトリック政策に対する宗教戦争として始まったが、旧教徒のフランスがハプスブルク家に対抗するため、新教徒側で参戦したため、宗教戦争から政治的な戦争の色が濃くなった。この戦争の世界史的な意義は、神聖ローマ帝国が事実上有名無実化し、[⑭ 主権国家体制]が確立したことである。教皇・皇帝というヨーロッパを普遍的に支配した権威・権力が衰え、国内の統治力と独立性をもった国家が、対等な外国関係をもとに自国の利益を優先して競う国際秩序が出現した。

### 【4】植民地獲得戦争

16世紀はスペイン・ポルトガルが大航海時代をリードし、17世紀には[⑮ オランダ]が中継貿易で覇権を握ったが、海上権を争って英蘭戦争が勃発した。ところが婚姻関係と[⑯ 名誉革命]によりイギリスとオランダが同君連合となったので、今度はイギリスとフランスで植民地獲得戦争が始まる。ヨーロッパの絶対主義諸国の戦争と連動して海外でも戦争が行われ、最終的に[⑰ 七年戦争]後のパリ条約(1763)でイギリスが世界市場を獲得する。

## 【5】環大西洋革命

イギリスが世界市場を獲得した結果、〔18 産業革命 〕が始まった(資本蓄積+労働力創出+世界市場)。また、植民地アメリカでは経済統制が強められた結果、〔19 独立革命 〕が起こった。フランスでは産業革命によるイギリス製品の流入と独立革命介入による財政難で経済混乱が起こり、〔20 フランス革命 〕が勃発する。フランス革命によるヨーロッパの混乱に乗じて、〔21 ラテンアメリカ 〕諸国は独立を達成していった。

## 【6】国民国家

ナポレオン戦争後のヨーロッパは、オーストリアの〔22 メッテルニヒ 〕主導のもと、保守・反動体制であるウィーン体制が敷かれた。ウィーン体制は市民階級の自由主義や各地域の〔23 ナショナリズム 〕を弾圧するものであった。だが、1848年の革命でメッテルニヒは逃亡、ウィーン体制は崩壊した。ドイツ・イタリアではナショナリズムの下、国民統合が図られ分権的な状態から、国家の統一が進んでいった。イギリスは自由主義的改革を行いながらパクス=ブリタニカで全世界を資本主義体制下に巻き込んでいった。当時、世界にはアラブ世界のイスラーム国際体制と東アジアの〔24 冊封体制 〕という国際秩序が存在していたが、それらの地域を西欧的な〔25 国民国家体制 〕へと組み込んでいったのである。

## 【7】帝国主義

産業革命はヨーロッパ各国でも起こり、原料供給地と商品輸出先の確保が必要となった。それに加えて、外国政府への借款供与や鉄道建設などの投資など〔26 資本輸出 〕も活発化していく。これにより帝国主義列強は20世紀初頭までに世界の分割をほぼ完了する。しかし今度は帝国主義列強同士で世界の再分割をめぐって衝突し、帝国主義戦争が勃発。ついに〔27 第一世界大戦 〕にまで発展する。

## 【8】総力戦

これまでの戦争は軍による戦争であったが、第一次世界大戦からは戦争の質が変わった。全国民を戦争に協力させる〔28 総力戦 〕となったのである。今まで社会的弱者であった労働者階級・女性・植民地なども総力戦に協力することとなった。このため、戦後、戦争協力をした社会的弱者たちの地位向上が図られたのである(戦争と社会契約)。

## 【9】資本主義に対する挑戦

### (1)〔29 ファシズム 〕

資本主義の最高段階としての帝国主義で世界戦争が勃発すると、資本主義という世界の枠組みに対してどのように対処していくかが問題となってくる。そんな中、1929年に〔30 世界恐慌 〕が起こり、世界経済は危機に陥る。そのような資本主義の危機に出現したのが、ファシズムである。国民を一元的に国家のもとに統合し、国民生活を統制することによって国家の危機を克服する〔31 全体主義 〕である。国民を絶えず動員するために、国民の生活や労働者の期待にも配慮を示す。

### (2)〔32 社会主義 〕

第二次世界大戦後、アメリカの西側資本主義陣営に対抗したのが、ソ連の東側社会主義である。計画経済に基づく私有財産の否定と富の公平な分配を追求したが、失敗。ソ連は特権的な官僚が支配機構を牛耳り、指導部が高齢化し、縁故主義が蔓延したため、社会が停滞し崩壊した。

### (3)〔33 福祉国家 〕

資本主義の枠組みの中で、社会保障を充実させて富の公平な分配を行おうとしたが、うまく機能していない。逆に小さな政府を唱える新自由主義が台頭し、非正規雇用で若者を使い潰す時代となった。

### (4)宗教原理主義とテロリズム

冷戦崩壊後のグローバル資本主義に巻き込まれ、競争に敗れて社会的弱者となった人々に自己責任の論理がのしかかり精神的疲弊が起こった。それを救済したのが〔34 宗教原理主義 〕で、グローバル資本主義の象徴のビルに航空機で突っ込む事件が発生した。